

東京稗史出版社の予約出版と版權

——明治出版制度下の攻防の一面——

鈴木裕人

東京稗史出版社の倒産

東京堂刊行「明治文学名著全集」第九集は、菊亭香水（鶴谷佐藤蔵太郎）の『悲憤世路日記』である。巻頭の「解題」で、神代種亮は、坪内逍遙の「私は読む機会を得なかつたが、地方ではたいへん読まれたものだつた」、徳富蘇峰の「随分読まれたものだ」という回想を紹介したうえで、「発行部数より言はば、明治初期の小説中、恐らくは其の右に出づるもの無からむ歟」と評す。また、著者・香水も自伝中に、「世路日記ハ大ニ読書社会ノ歡迎ヲ受ケ、前後五十三版ヲ重ネテ書名ハ普ク全国ニ知ラレタリ¹」と記している。『世路日記』は、自他ともに認める明治の大ベストセラーであつた。

日本において「ベストセラー」の語が使われたのは大正初年代のことだが、現象としては言葉よりも前からあつた。『世路日記』はその好例である。柳田泉は、明治時代が今日に通ずるベストセラー成立の条件が整つた時期だといふ。

一体、ベストセラーというものは、明治以前にもあつたものかどうか。規模の大小に拘泥しなければ、徳川時代にも確かにあつたと思う。然し明治時代に見るような大規模なベストセラーは、これは印刷普及の明治時代に入って始め

て出来た現象で、一般の文学乃至教育の進歩、さてはそれに負うところのある読者階級の大きな進歩發達に因るところがあつて、出来たものと見てよい。²⁾

柳田はベストセラー成立の条件として「印刷普及」と「読者階級」の誕生を挙げ、後者の検討へ入る際に、明治の文芸書中のベストセラーとして『世路日記』を紹介する。おそらく空襲で焼いてしまった、かつての所有数も記している。

「世路日記」の一書でさえ、私が実際もっていた異版は約三十種あり、大は菊判から、中は四六判、小は菊半截の袖珍判まで様々なものがあつた。それで今その一種が仮に一万部ずつ売れたとして、これだけで三十万である。

今日のベストセラーリストは書店で何部売れたという記録で、この数字は重版回数に直結している。けれども明治の『世路日記』では三〇種もの異版が出版されたというのだから、ひと口にベストセラーといつても昔と今では様子が違う。そのうえ、「異版」というのも、同じ出版社の単行本と文庫本の総数といった意味ではないのだ。菊判・四六判・袖珍判と判型がまちまちなのは、それぞれの出版社が異なることからきている。

『世路日記』の初版は一八八四（明治17）年九月で、発売元は東京稗史出版社であつた。しかしこれが直ちにベストセラーとなつたのではなかつた。部数を伸ばしたのは、東京稗史出版社が翌年に倒産した後に出た、おびただし数の異版であつた。柳田が集めた三〇種とはこちらを指し、香水らが回想するのも初版本ではない。

ではなぜ、明治随一ともいわれる大ベストセラータイトルを擁していながら、東京稗史出版社は倒れたのか。遺された書物を繕けば、東京稗史出版社の生き残りを賭けた戦略が記されていた。また、膨大な『世路日記』の異版が、同社の弱点と、出版界からの敗退を物語つてもいた。

ベストセラーと予約出版

東京稗史出版社は、一八八二（明治15）年四月に『南総里見八犬伝』や『為朝外伝椿説弓張月』などの馬琴作品の活字翻刻本を看板に掲げ出版事業を開始した。方針転換を図るのは二年後で、『世路日記』のほか、当時人気を博した三遊亭円朝の『評牡丹燈籠』を講談速記本として発行。文学士の肩書をもつ坪内雄蔵（逍遙・春のやおぼろ）とも接触し、翌一八八五（明治18）年には『小説神髓』、『三載当世書生氣質』刊行の約束を取り付けた。しかし、その年五月の総生寛『東西両京市誌』以降出版物が途絶え、逍遙の日記には、「中尾（東京稗史出版社の編集者・中尾直治）失敗し 芝区三田台裏町十七番地に移転 書生氣質破約となる」（五月十七日）^④と記されている。「失敗」の原因は資金難であったと考えられている。^⑤

東京稗史出版社の書籍出版・販売方法は、予約出版であった。このメリット・デメリットについて、東京稗史出版社の調査を行った磯部敦は次のように述べている。

予約出版方法とは、新聞広告によつて遠方の購買者をも取り込み、事務手続きを経たあと送金小切手などと引換に通運などによつて予約者の手もとに直接届けられる方法である。予約者の予約金や前金によつて書籍を制作するため自己資本をそれほど必要とせず、印刷の時点で発行部数を微調整できるといふメリットがある一方、予約者が送金を止めたなら元を取ることができず、完遂できなくなつてしまつというデメリットもある。^⑥

磯部は続けて、「予約出版方法は投下資本を確実に回収できる方法なのだが、それはあくまでも予約者が毎回入金するという前提があつてのことである」、「出版元としては誠意と信用を予約者に見せるしかない。この不可視のものをいかに可視化していくかが出版元の尽力すべき点」だとして、その検証へと進んでゆく。ただしベストセラーの観点から着目した

いのは、右引用部の「自己資本金をそれほど必要とせず、印刷の時点で発行部数を微調整できるといふメリット」である。自己資本の少ない出版社にとって、確実に捌ける冊数だけを印刷・製本し得るのは、失敗を避ける点では大変なメリットとなる。しかし、換金を最優先して必要最低限しか作らずにいると、反響があつても在庫不足で二の矢が継げない。少数の予約出版はベストセラーを生み出す方法としては適さないのだ。後述するように、同じ本を他社も販売する供給過多の市場では在庫や再版が求められることはないのだから、ベストセラー化など眼中になつたのだらう。

また、書店を介さない直接販売は、マージンをカット出来る分、利益の面では良くなるが、部数が増えるほど作業の負担も大きくなる。東京稗史出版社の創業時（一八八二年四月）の広告では予約募集枠は千で、申込が殺到したためにすぐに二千追加したのだが、七月には「三千部満数の後は断然予約を謝絶」と謳つた。これには購買欲を刺激する意図もあるが、対応能力の限界を感じてもいたのではないか。⁸⁾

東京稗史出版社と入れ替わるようにして一八九〇（明治20）年に創業した博文館は、「其頃は未だ雑誌に著作権の規定なかりし故、何れの雑誌より採録するも自由であつた」⁹⁾ために、『日本大家論集』を発行する。後に触れるが、「版權条例」の隙間をぬつて各種雑誌の記事を転載するというアイデアは、東京稗史出版社の活字翻刻業に通じており、この二つの出版社は明治の新制度下でよく似た戦略をとつていた。ただし、販売方法や部数についての考え方は違った。

『日本大家論集』の「第一編は、最初三千部印刷したのが忽ちに売り切れ、七月中に四版を発行し、尚ほ幾回も版を重ね、翌明治二十一年二月に尚ほ第一編を重版した。（…）大売捌は其頃東京の東海堂、良明堂、巖々堂、信文堂、盛春堂等で取扱ふたが、忽ちにして全国に広まつた」¹⁰⁾

「第一編」の発行日は六月十五日だから二ヶ月間に四版を出している。販売方法は東京稗史出版社とは異なり、本屋へ卸

している。薄利多売を旨とし、不特定多数へ向けた販売のためではあるが、四年後には取次・東京堂を設立するのだから、書籍（雑誌）発行と流通との分業は博文館の積極的な戦略であったと考えられる。この時の館員（社員）は館主・大橋佐平を含めて三人だ⁽¹⁾というから、もしも東京稗史出版社と同様の直接販売であったなら、博文館のマンパワーでは大量注文に対応しきれなかったであろう。購入者へ個別発送していたら、初刷だけでも一人千冊がノルマとなるところであった。好機を逃さず短期間で再版出来たのは、発行に一本化した体制を整えていたからである。

第一冊から好調であった博文館は、意外にも「明治」二十一年三月の末に、損益計算と財産目録を作って見ますると、前年六月から約九ヶ月間奮闘努力した純財産の総額が、僅かに五百二十五円⁽²⁾であったが、「此の五百二十五円は、博文館に取りましては最も大切な企業資本と為」り、後には「出版王国」と呼ばれるほどの成長を遂げた。東京稗史出版社も最初の企画である『八犬伝』『夢想兵衛胡蝶物語』『弓張月』の予約数は『日本大家論集』初刷と同じ三千⁽³⁾であったというが、貯えることはおろか、社主・近藤と中尾は集まった予約金を「山分けして盛んに豪遊を極め（…）計画はとんとそつちのけにして金を使つて」⁽⁴⁾しまった。そのため「予約金は来たが『八犬伝』の出版は出来ないという不始末」ですらあった。資本を蓄え在庫をつくり、本屋へ卸してより大きく売れることもできたはずだが、博文館となるチャンスを自ら潰したのである。

磯部は、『胡蝶物語』の奥付に記された「発売所」の検討と、「南柯夢月刊予約報」（一八八二年十月配布）とによって、東京稗史出版社の『胡蝶物語』『銚南柯夢』『昔語質屋庫』については、鳳文館創設者の甘泉堂山中市兵衛（和泉屋市兵衛）が築いた流通網によっても購入できた（配送された）と指摘している。ただし、『南柯夢』の「卷之一」にある「本社出版書籍予約募集広告」をみると、送金には郵便による為替や書留での送金もしくは切手での支払いが指定され、領収証や見本は郵送される。そのうえ、「書籍運搬費ハ東京府下ニ限り当社ニテ支弁シ各地方ノ分ハ実費ヲ申受ク可シ」と、送料は購入者負担であった。新聞に掲載された『南柯夢』予約募集広告でも、「定価一冊二十錢十冊前金一円七十錢府外郵送料一冊

金六銭¹⁵⁾とあり、基本的には社と顧客との直接取引が行なわれ、一八七二(明治5)年以降急速に発展し、全国に張り巡らされたインフラ・郵便が利用されたことが推測される。ただし東京府下の集金には集金人が直接赴くとあるので、府下は配送費「当社ニテ支弁」の実は各戸訪問であった可能性もある。

東京裨史出版社の予約出版が崩れる様は、一八八四(明治17)年に顕著に現れるが、それ以前の新聞を用いた予約者募集は、出版社と読者との直接取引志向を示している。社と客との力関係は刻一刻と変化し、サービスも一定とは言い難いが、当初の理想は、予約出版(残本なし)・直接取引(マージンなし)・郵送(送料購入者負担)であろう。山中市兵衛のネットワークや、同じく磯部の調査した店売によって明らかにされた書籍流通の多様性は興味深い。しかし社にとって最も理想的な販売方法は、やはり読者と直接取引をする予約出版であったといえそうだ。

翻刻と版權

東京裨史出版社の企画した馬琴の活字翻刻出版は、諸刃の剣であった。ロバート・キャンベルは、明治十年代の予約出版流行について、『資治通鑑』を例にあげながら述べている。

〔一八八二年〕二月四日、〔…〕山中市兵衛が『資治通鑑』百四十八冊の句点読返り点付き製版出版を発表〔…〕この年、底本が共通する大部の『資治通鑑』は、ほぼ併行する形で、四種類も予約出版されることになる。¹⁶⁾

一八八〇(明治8)年九月三日に公布された「出版条例」(太政官布告一三五号)によって江戸の「板株」が消滅し、代わって「版權」が認められるようになった。第二条が「図書ヲ著作シ〔…〕出版ストキハ三十年間専売ノ權ヲ与フヘシ此ノ

専売ノ權ヲ版權ト云フ／但シ版權ハ願フト願ハサルトハ本人ノ随意トス故ニ版權ヲ願者ハ願書ヲ差出シ免許ヲ請フヘシ其願ハサル者ハ各人一般ニ出版スルヲ許ス」で、附則には「従前出版ノ図書ハ此条例発行ノ日ヨリ四ヶ月ヲ限り此条例ニ準拠シ更ニ願出ツヘク右限内願出サルモノハ総テ版權無之儀ト心得ヘシ」とある。

馬琴の作品については、馬琴の曾孫・橘が「明治何年頃であつたか、出版権の届け出を願はなかつた事（先般した）」、母も私も残念に思ふ（17）と後悔しているように、版權が取得されなかつた。東京裨史出版社はこれを狙つたのであるが、「馬琴読本に限らず近世の戯作類は無版權であつたために、おびただし数の翻刻本が出版されることになつた（18）」。乱立する他社類似企画を抑え込むことはできず、そのうえに自ら招いた資金不足で、出版も計画通りには進まなかつた。

東京裨史出版社が過熱する馬琴翻刻戦線から離脱したのは、創業三年目の一八八四（明治17）年のことである。この年、遊谷子『異談和莊兵衛』（二月 前後二冊）、『牡丹燈籠』（七月～十二月 全十三冊分冊）、菊亭香水『徳政世路日記』（九月）を發行。馬琴は先から刊行が続いている『八犬伝』のみとなつた。広告では、『和莊兵衛』は馬琴の『無想兵衛』の関連書と位置付けているが、別の作家をとりあげたことは後から思えば撤退の兆しであつた。それまでは広告を兼ねて印刷等の進捗報告が新聞に掲載されていたが、『牡丹燈籠』の記事が目立つようになり、馬琴翻刻会社からの脱却が進められる。『牡丹燈籠』と『世路日記』が出版されると、広告には店頭販売の開始も記され、予約出版の見直しもなされていた。

無版權の近世作品翻刻は、稿料が不要な上に、作品が完結しているため出版計画を立てやすかつた。しかし好企画は似品が出回り、それが法に則っているだけにどうすることも出来なかつた。このような中で顧客へアピールするには、他社が真似できないオリジナリティのある商品が必要となる。真似できないというのはもちろん版權の取得を意味する。

東京裨史出版社が初めて版權を取得した書籍が、『牡丹燈籠』であつた。原稿依頼などほぼ未経験であつたが、書き手を選び、交渉は積極的に行つた。

『牡丹燈籠』の速記者・若林珥蔵は「その社〔東京裨史出版社〕の中尾某〔直治〕が余の所に来て、当時一流の落語家三

遊亭円朝の人情話を寄席の高座で話すのをそのまま、速記して出版することを快諾したから、速記してくれ⁽²⁾と言ったことを紹介し、東京稗史出版社から依頼を受けたことを回想する。円朝による記述は管見の限りでは見当たらないが、「快諾した」という円朝にも、東京稗史出版社の側から接触している。若林には、「円朝には稗史出版会社から交渉したところ、承諾を得た⁽²⁾」という回想もある。また東京稗史出版社の社員であった大柴四郎によれば、円朝側は「原稿料が一文もいらぬ、たゞ先方は人気稼業だから時々気散しをやらしてくれ⁽²³⁾」という絶好の条件を提示してきたそうだ。また、香水の手も煩わし「若林珥蔵が速記せるものに私が筆を入れ⁽²⁴⁾」たという。

かくして円朝の高座を若林が速記し、香水の手を経て、『牡丹燈籠』の原稿は完成した。ただし版權を取得したのは、全十三冊の全てではない。

明治十七年七月廿三日御届

明治十七年七月 出版

右が「第九編」の刊記だが、「第十編」では次のようにかわる。

明治十七年十月八日版權免許

明治十七年十月 出版

『官報』三九四号（一八八四年十月二〇日）の「版權書目広告」欄（八日付）には、確かに『牡丹燈籠』（十、十三の四冊分）の書名がある。また、「怪談牡丹燈籠第九編付録」（第九編）の九月付の「広告」には、「第十編以下三冊ハ過般版

権を出願したれば免許を蒙るまで暫く牡丹燈籠の発売を見合せ版權免許次第第十編以下三冊ハ一途いちどに発売すべし」と書かれてもいた。しかしそれ以前の分冊掲載分については、版權は取得されていないのだ。『出版書目月報』（一八八四年八月号）では、『牡丹燈籠』の「第九編」までが「無版權之部」に記載されている（第十十三編は「有版權之部」に記載）。「第九編」と「第十編」の間に何があったのか。九月の社主交替も影響しているかもしれないが、一番の要因は、『牡丹燈籠』の異版が出版されてしまったことである。

一橋大学図書館が所蔵する『牡丹燈籠』は、鶴聲社のボール表紙四六判である。奥付を次に写す。

明治十七年十月三日御届 定価六十銭

全 十月 日出版

口演人 三游亭圓朝

筆記者 若林珣藏

元板人 京橋区南伝馬町三丁目 稗史出版社
（東京稗史）

京橋区鎗屋町十四番地

翻刻出版人 閻華堂 野村銀治郎

発売元 日本橋区横山町二丁目 鶴聲社

この後には「大売捌」として、地本問屋同盟組合の二十五店が名を連ねている。本の内容は東京稗史出版社既刊の「第九編」分までを、若林珣藏の「序詞」も含めて翻刻し、原本にはない口絵を加えている。異版は「出版条例」に則っているのだから東京稗史出版社に打つ手はなく、このままでは馬琴翻刻の二の舞である。そこで初めて版權が必要となった。

版權を申請する際には留意点があった。浅岡邦雄「版權条例」「版權法」における雑誌の権利⁽²⁵⁾によると、版權を取得したとしても、その著作が雑誌や新聞に掲載されていた場合には、翻刻を防ぐことが出来ない。

福沢〔論吉〕の『男女交際論』発行からわずか半年もたらずに四種が売り出された。〔…〕福沢論吉が明治初年、自著の偽版に対して積極的に処罰を望むべく行動したことはよく知られているが、もし仮にこの四種の『男女交際論』が偽版であったのなら、さぞ福沢はこれら出版人等を訴えたであろうが、その気配がまったくなくない。まして、版權取得している書物でありながらである。〔…〕そうしなかったのは、訴えることができなかったからに他ならない。つまり、「一度新聞雑誌に掲載せしものは、抜粋し版權免許を受けて一部の書と為し之を発行すると、他人の原文に就て之を編纂するを如何んともする能はさりし」〔『朝野新聞』一八八八年一月七日社説「五種の条例」〕ためであった。

『牡丹燈籠』分冊は数丁をこよりで綴じた薄冊子で、これは『書生氣質』にも採用されたために珍しい製本として言及される機会が多い。ここでは、『書生氣質』に対する三田村鳶魚の印象を「明治式合巻の外観⁽²⁷⁾」より引く。

明治の小説を画すべき当世書生氣質が、合巻でもなく、洋綴でもなく、雑誌とも見るべき日本紙へ刷つた分冊で刊行されたことは、当時として最も新しい形式⁽²⁸⁾だったのである。

鳶魚の「書生氣質の発行方法其他」⁽²⁸⁾を参照すると、「雑誌」とは『芳譚雑誌』などの「小説雑誌」を指す。新聞の「続き物」が独立して雑誌となったもので、簡易製本の薄冊子に作品を分載し、完結後に製本できるようにしていた。詳細は他日に譲るが、『牡丹燈籠』や『書生氣質』の分冊形式はこれが源流だ。『牡丹燈籠』が分冊を採用したわけは、広告文の「〔円朝〕

子の繁忙いそがしきと出版を取急いそぎたるとに依り原稿の校閲を子に請ふの暇なく草卒印刷に附した⁽²⁰⁾の、特に後者の通りであらう。「小説雑誌」は短期間で発行されることが売りであったが、東京稗史出版社の場合は、自転車操業が限界へと全速力で進んでいたことも無関係ではあるまい。⁽³⁰⁾全編の完結を待たずに、脱稿されたものから分冊で小出しに刊行することで、紙代や印刷代といった費用を分割できるうえに売上げもすぐに入る。分冊の決め手はこれだろう。

鶴聲社は一八八六(明治19)年一月にも『牡丹燈籠』⁽³¹⁾の出版に関わっているが、東京稗史出版社が版權を得た「第十編」(第十九回)以降の回は収録されることがなかった(続編が出版された形跡はない)。原本からそのまま写したような、⁽³²⁾結局ハ次編に委細く説尽すべし⁽³³⁾(第十八回)という本書の締めくくりからは読者への誠意は感じられないけれど、法を守る姿勢は見取れる。『牡丹燈籠』は、鳶魚の目には「雑誌とも見るべき日本紙へ刷つた分冊」と映ったかもしれないが、間違いなく書下ろしの新刊本であり、「中本」(「版權書目広告」※『出版書目月報』では「小本」)であった。これは外見や形の問題ではなく、制度にかかわるからこそ、「最も新しい形式」なのである。

『世路日記』異版

東京稗史出版社は出版出来なかったが、『書生氣質』も分冊・版權で準備が進められており、『牡丹燈籠』⁽³⁴⁾で編み出された方法を確立しようとする様子がかがわれる。東京稗史出版社は土壇場で版權に活路を見出していった。

では、『世路日記』はどうか。『世路日記』の出版は一八八四(明治17)年九月で、七月から刊行が開始された『牡丹燈籠』よりも後であった。しかし出版届の順は逆で、奥付によると五月に届け出ており、七月十四日御届の『牡丹燈籠』(第一・二編)よりも早かった。版權の重要性を認識するのはまだ先なので、『世路日記』は無版權である。

『世路日記』は全編書下ろしではなかった。冒頭でも引いた神代の「解題」には、次の「作者直話」が記されている。

『最初田舎新聞紙（中津川の新聞紙名）に連載（一八八〇年一十月 全十四回）せるものを纏めて一部の書となせしは大角豊治郎と云ふ書肆（春山堂）にて、此人は京橋区采女町に本店有之候。其体裁は薄青色の表紙に毎月本艶才春話と題し、挿画は銅版製にて綺麗に出来居り候。明治十五年（四月に上編、七月に中編）のことにて有之候。其後間もなぐ大角死亡したる後、東京稗史出版社が更に改版して〔下編も加え〕徳風世路日記〔全〕と題して出版仕候。』

『世路日記』は、旧版を増補し改題して新作らしさを演出したのであって、有名な旧作を翻刻していた出版社としては思いついた方針転換である。洋装本も社としては初めての試みであった。翻刻と書下ろしが半々の内容なのだから、東京稗史出版社の活字翻刻から版權所有への過渡的出版物と位置付けられる。しかし無版權である以上は他社競合への対策としては弱い。その結果が記録的な数の異版の出版で、東京稗史出版社は閉業に追い込まれたのではなかったか。

しかし異版を調査した結果、『世路日記』が無版權であるために東京稗史出版社が不利益を被るといふ筋書は、訂正すべきだと推定している。三十八冊(33)の異版『世路日記』の奥付記載出版日を確認したところ、文事堂の一八八五（明治18）年十一月より以前に遡ることは出来なかつた。『牡丹燈籠』はすぐに翻刻されたのだが、幸か不幸か『世路日記』は注目されず、ベストセラーのきっかけをつくつたのは、東京稗史出版社が廃業した後に出た、文事堂版なのである。

当の文事堂も、売れ始めるまでは、『世路日記』の真価には気付かなかつたはずだ。無版權を狙つたわけではなく、版權こそないものの正式な譲渡ともいえる経緯で出版に至っている。東京稗史出版社が廃業する際、『書生氣質』は晩青堂へ、『小説神髓』は松月堂へ、(34)そして『牡丹燈籠』は文事堂へと渡つた。その文事堂版『牡丹燈籠』の奥付には、「同（明治十八）年二月廿六日別製本御届／同 五月十八日版權譲受御届／同 同月同日再版并二別製本御届」とある。(35)文事堂『世路日記』の奥付には「明治十八年五月廿日翻刻御届」と、二日違いの日付が記されているのだから、『牡丹燈籠』の版權のオマケのような扱いだったとみられる。

右の文事堂版『牡丹燈籠』（ボール表紙洋装、国立国会図書館・鶴見大学図書館蔵）の表紙には「東京稗史出版社」と刷られている。資金繰りに失敗して差押えられたのか、版心に「東京稗史出版社」と刷られた『小説神髓』³⁶と共に、印刷・製本済の本すら発売出来ない東京稗史出版社の逼迫を伝える資料である。供給過多の予約出版界を離れたことで初めて、オリジナル商品の再版に価値が見出されたのだが、ついに間に合わず、東京稗史出版社は倒れたのであった。

一方の文事堂は、十一月になって売り出した『世路日記』が好評で、翌一八八六（明治19）年三月に再版、七月には三版と改版を出し、東京稗史出版社では六店全てが東京であった大売捌所も、「売捌 全国各地書林」（三月再版本以降）へと拡大して新規の読者を開拓した。飛ぶような売れ行きの『世路日記』を他社が放っておくはずがなく、無版權であるから異版も出始める。しかし、この頃に一番多く『世路日記』を売ったのは、他でもなく文事堂であったようだ。³⁷調査した三十八冊中の十八冊が文事堂のものであった。特に、奥付に一八八六（明治19）年三月・七月と記されている再版本や改版では異装版が複数見つかっており、再版届を出さずに印刷したことが疑われる程だ。³⁸当時のシェアそのままではありえないが、百数十年の間には他社本と同じように震災・戦火をくぐったのであるから、発行数推測の参考にはなろう。

文事堂は、無版權に勝るのは、より広い市場と商品供給能力であることを示した。大阪の偉業館が一八九五（明治28）年に『羅悲憤慷慨世路日記』によって版權を取得した後にも、旧版（東京稗史出版社版）の翻刻出版は続いたのだから、東京稗史出版社が資金なし・書店販売なしの予約出版商法を選んだ際に、もう勝負は付いてしまっていたのである。けれども東京稗史出版社が出版届の通りに、『牡丹燈籠』よりも先に『世路日記』を出し、さらに再版する方に社運を賭けていたならば結果は違ったかもしれない。そこで『世路日記』が当たって『牡丹燈籠』が出版されなかったとしたら、『牡丹燈籠』、逍遙、『浮雲』と続く日本近代文学史の記述はいったいどうなったのだろうか。今となつては想像する術もない。

凡例

- ・引用部中の漢字は基本的に常用字体に改め、歴史的仮名遣いはそのままとした。ルビは原則として外した。
- ・引用部中の「〔 〕」は引用者による補足であり、「〔…〕」は省略を、「〔 / 〕」は改行を示す。
- ・和暦を併記する際にはアラビア数字を用いた。

註

- (1) 菊亭香水『文士佐藤鶴谷伝』未刊。柳田泉『政治小説研究』(上、春秋社、一九六七年八月)に稿本より一部翻刻。
- (2) 柳田泉「読者の立場の確立——明治文学における試論」(『文学』一九六二年十一月号)引用は『柳田泉の文学遺産』(一、右文書院、二〇〇九年九月)による。
- (3) 奥付では六月だが、出版広告を見る限り実際は九月の出版であった。谷川恵一も『明治名作集 新 日本古典文学大系』(明治編三〇、岩波書店、二〇〇九年三月)の校注で九月出版としている。
- (4) 大村弘毅筆写校注「逍遙日記 幾むかし」(『坪内逍遙研究資料』五、新樹社、一九七四年五月)。「裏」は原文。
- (5) 「東京神史出版社は活版印刷所としても活動していた。したがって活字をはじめとする印刷機器類への資本投資が大きいわけで、自己資本のみの運営というよりは、予約者たちの前金で何とかやりくりをしていた、つまり自転車操業であったことを十分予測させる。そのような状況に予約者の離脱が加われば、運転資金の不足という事態におちいるのは目に見えて明らかである」(磯部敦「東京神史出版社の足跡」註6参照)。また、信濃出版社の設立から終焉までを追った、鈴木俊幸「信濃出版社と脩道館」(『近世読者とそのゆくえ 読書と書籍流通の近世・近代』平凡社、二〇一七年十二月)やロバート・キャンベル(註16等)、稲岡勝らが、予約出版社のひな型を提示している。
- (6) 「東京神史出版社の足跡」(『出版文化の明治前期 東京神史出版社とその周辺』ペリかん社、二〇二二年二月)
- (7) 『東京絵入新聞』一八八二年七月二日
- (8) 「夢想兵衛胡蝶物語愈々本月三十日製本竣功候ニ付來十月一日ヨリ予約ノ順ヲ追ヒ配達可仕候也」(『いろは新聞』一八八二年九月二十七日)のように一斉発送ではなく、予約順で発送された。磯部「東京神史出版社の足跡」(註6参照)では、確認さ

れている歴代構成員(社員)は七人である。

- (9) 坪谷善四郎『博文館五十年史』博文館、一九三七年六月
- (10) 坪谷善四郎『博文館五十年史』(註9参照)
- (11) 『博文館小史』(坪谷善四郎『大橋佐平伝』栗田出版会、一九七四年十月)
- (12) 『博文館小史』(註11参照)
- (13) 「前後合せて各三千部の予約を募り申候処既に三書とも二千五百有余部の多きを得たり依て今予約の現数三千部に達したるものと仮定し愈々本月十五日より三千部宛の出版に着手」(『東京絵入新聞』一八八二年七月二日) また、「本社出版書籍予約募集広告」(『三七全伝南柯夢』一、東京稗史出版社、一八八二年十月) には、「本書『八犬伝』ノ予約三千部既ニ満數セシ」とある。

- (14) 大柴四郎談「円朝のお、喜び」(『読売新聞』一九二六年一月八日)
- (15) 『絵入自由新聞』一八八二年十月二十五日
- (16) 「東京鳳文館の歳月」(上、中野三敏監修『江戸の出版』ぺりかん社、二〇〇五年十一月)
- (17) 滝沢橋「思ひ出の記」(『橘女思ひ出の記』『ビブリア』一九七五年一月号における翻刻)
- (18) 磯部敦「東京稗史出版社の足跡」(註6参照)
- (19) 「彼馬琴翁の高著なる夢想兵衛は此冊子(『和莊兵衛』)を読み始めて鳥遊の望を発したりされば和莊は夢想の兄弟、弟に劣らぬ珍談奇説は予約の方法に依り購ひ得て知り給へ」(『東京日日新聞』一八八三年十月二十三日) と、馬琴に關連付けていた。
- (20) 『和莊兵衛』の広告(『絵入自由新聞』一八八三年十二月一日) では「每篇合本一冊全部三冊予約実価金八十錢但前金を要せず来十二月出版、見本並予約方法書ハ二錢の郵便切手送附次第進呈すべし」「今回予約を募り前記の低価を以て出版すべし統々締約あらんことを庶幾ふ」であったが、『牡丹燈籠』では「第三編出版○定価七錢五厘○府外郵税二錢○南伝馬町東京稗史出版社発売○売捌各絵及紙店」(『絵入自由新聞』一八八四年八月十六日)、『世路日記』では「慘風悲雨/世路日記 洋装全一冊 定価金六十五錢 郵送税金二十錢/但当社予約諸君に限り郵送税十錢を減す」「各書林にても売捌き申候」(『東京日日新聞』一八八四年九月六日) とある。

- (21) 若林珥蔵「予と円朝 故三遊亭円朝の事ども (六)」(『サンデー毎日』一九二六年十月十七日号)
- (22) 若林珥蔵「○三遊亭円朝の「牡丹燈籠」(『若翁自伝』若門会、一九二六年十月)
- (23) 大柴四郎「原稿料はロハだ」(『読売新聞』一九二六年一月九日)
- (24) 神代種亮「解題」(『巖波世路日記 明治文学名著全集』九、東京堂、一九二六年十一月) 内での直話。
- (25) 『著者』の出版史』森話社、二〇〇九年十二月
- (26) 柳田泉「解題」(『坪内逍遙』当世書生気質』岩波文庫、一九三七年三月)、稲垣達郎「解題」(『坪内逍遙集 明治文学全集』十六、筑摩書房、一九六九年二月)、宗像和重「解説」(『坪内逍遙』小説神髓』岩波文庫、二〇一〇年六月改版)、西野嘉章「合巻」(『装釘考』玄風舎、二〇〇〇年四月) など。
- (27) 『早稲田文学』一九二五年三月号
- (28) 『早稲田文学』一九二五年七月号
- (29) 『牡丹燈籠』第九編(一八八四年七月※実際の出版は九月末〜十月上旬)の「巻末付録広告」に記載。
- (30) 大柴四郎談「原稿料はロハだ」(註22参照)では、若林が「速記料が払つて貰へなかつたのに付け込み、訴訟を起こして原稿を差押へ、「塩原多助」を自分で出版してしまひました。(『東京稗史出版社の』近藤氏も今は仕方なくなり出版社も解散)とある。
- (31) 国立国会図書館所蔵本(明治十九年二月十二日内務省贈付)の印有。洋装本だが表紙デザインは新規。また、「鶴啼社發兌」の「啼」は上張訂正。奥付の売捌人は村上真助。大売捌筆頭は鶴聲社。村上には他にも出版物があるが、鶴啼社の屋号は確認できず不詳。鶴聲社發兌を一字貼り換えたか(鶴聲社の自社刊行物広告では未発見)。内容は、若林珥蔵「序詞」を削除、「古雄」の署名で「怪談牡丹燈籠序」(一八八五年五月付)が巻頭に掲載。口絵は、画工は鶴聲社版と同じだが、文事堂版の口絵の構図を用いて描き改められ、鶴聲社・文事堂版にはない目録(目次)もある(未収録の「第十九回」〜「第廿二回」まで記載)。章立は他版におおむね準ずるが全面改稿され、東京稗史出版社の売りであった口調再現の試みはみられなくなる(若林の「序詞」削除との一貫性がある)。
- (32) 一八八五年五月二十五日の『官報』(五六七号)「版權書目広告」欄(十八日付)に、「三遊亭当世書生気質 大本三冊 著 坪

内雄蔵／出版 中尾直治」とある。『書生氣質』は十七冊分冊で計画されており、一〜三号分の版權を取得した。

- (33) 文事堂十八冊、薫志堂四冊、精文堂一冊、石川正七・競争屋二冊、偉業館九冊、一・二三館二冊、盛陽堂一冊(国立国会図書館所蔵十冊)、国文学研究資料館「近代書誌・近代画像データベース」二〇二一年十一月三十日閲覧より二十冊、個人蔵八冊)。版の重複はあるが、奥付に記されている日付だけでは異版であるかの確定ができなかった(註38参照)。

- (34) 版權譲渡がなされたかは不明。松月堂の所在地と中尾の住所は近く、なんらかの便宜を図った可能性はある。

- (35) 『読売新聞』(一八八五年五月二十七日)の『牡丹燈籠』再版広告には、「今回原版主より版權を譲受け再版仕候」と五月二日付で記されている。

- (36) 明治大学図書館は、東京裨史出版社の表紙で綴じられた『小説神髓』上下版を所蔵しており、印刷のみならず製本も済んでいた。ただし、下巻巻末には正誤表が綴じ込まれているため、下巻については少なくとも一度は綴じ直されている。

- (37) 服部清道「文事堂市川路周」(『日本古書通信』一九七一年二月号)は、『世路日記』を「新味を出そうとして図」つたものだとして重視せず、「路周はこの年(一八八七年)十二月十七日に本籍を(現・茅ヶ崎市から文事堂のある)日本橋横山町に移している(…)後の出版業はこのころにいたつてようやく先行きの見通しがつけられるようになった」と推定する。しかし、指摘通りならば、『世路日記』こそが文事堂の礎である。

- (38) 一度の届で何度も出版したか、何ヶ所かで印刷・製本したものと思われるが、現時点では不詳。以下文事堂同日版異装本を示す。【凡例】表1の色 表1の枠・文字 奥付売価の枠飾(所蔵機関) ※註。

三月十七日版 ①白細枠四隅縁取り 枠に小丸(早稲田大学図書館) ②桃細枠四隅縁取り 枠に小丸(山梨大学附属図書館) ※①の色違い。 ③白二重枠 枠に井桁?(立命館大学図書館) ④桃中太枠 枠に小四角(個人) ※背は茶、表4は青。

七月十五日版 ①桃無枠鎖(尾鷲市立中央図書館) ②桃無枠・角書無鎖(会津若松市立会津図書館) ※①の角書なし。

- ③緑に植物柄題箋無(八戸市立図書館) ※価格無表示。 ④二色刷扇枠無(個人) ※菊判改版で東京薫志堂版と社名以外は同一。

